

# 〇 国 語 問 題

## 注 意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべてH Bの黒鉛筆またはH Bの黒のシャープペンシルで記入することになっていました。H Bの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。  
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は20ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は一〜三となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

### マーク・センス法についての注意

- マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。
- 一 マークは、左記の記入例のようにH Bの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
  - 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
  - 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しきれずに取り除いてください。

マーク例

①
1 2 3 4 5
0 0 ● 0 0

(3と解答する場合)

一 左の文章は、筆者がシベリアの強制収容所での抑留体験について回想したものである。これを読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

ひとつの情念が、いまも私をとらえる。それは寂寥<sup>せきりょう</sup>である。孤独ではない。やがて思想化されることを避けられない孤独ではなく、実は思想そのもののひとつのやすらぎであるような寂寥である。私自身の失語状態が進行の限界に達したとき、私ははじめてこの荒涼とした寂寥に行きあたった。衰弱と荒廃の果てに、ある種の奇妙な安堵がおとずれることを、私ははじめて経験した。そのときの私にはすでに、持続すべきどのような意志もなかった。一日が一日であることのほか、私はなにも望まなかった。一時間の労働のち十分だけ与えられる休憩のあいだ、ほとんど身うごきもせず、河のほとりへうづくまるのが私の習慣となった。そしてそのようなとき私は、<sup>(1)</sup>あるゆるやかなものの流れのなかに全身を浸しているような自分を感じた。

そのときの私を支配していたものは、ただ確固<sup>(2)</sup>たる無関心であった。おそらくそれは、ほとんど受身のまま戦争に引きこまれて以来、ついにたどりつくべくしてたどりついた無関心であったかも知れぬ。そしてそのような無関心から、ついに私を起ちあがらせるものはなかった。だがこの無関心、この無関心がいかにささやかでやさしく、あたたかな仕草ですべてをささえていたか。私にとって、それはほとんど予想もしないことであった。実際にはそれが、ある危険な徴候、存在の放棄の始まりであることに気づいたのは、ずっとのちになってからである。私の生涯のすべては、その河のほとりで一時間ごとに十分ずつ、猿のようにすわりこんでいた私自身の姿に要約される。のちになつて私は、その河がアンガラ河の一支流であり、タイシエットの北方三〇キロの地点であることを知った。原点。私にかんするかぎり、それはついに地理的な一点である。しかし、その原点があることによつて、不意に私は存在しているのである。まったく唐突に。私はこの原点から、どんな未来も、結論も引き出すことを私に禁ずる。失語の果てに原点が存在したということ、それがすべてだからだ。

だが、収容所生活のすべてのデテールから言葉が消失するのではむろんない。言葉が無力となるのは、主とし

て収容所の現実にかんしてである。現実の生活において言葉が無力なのは、私たちが人間として完全に均らされてきたからであり、反応も発想も、行動すらもほとんどおなじであつたからである。一般に囚人は、現在の実感については語らない。<sup>(3)</sup> 現実が決定的に共有されているとき、それについて語るこの意味はうしなわれる。そこでは人びとは、言葉で話すことをやめるだけでなく、言葉で考えることをすらやめる。一日の大部分がいわば条件反射で成り立っている生活では、思考の自立のユウイン<sup>(4)</sup>となる言葉から、人びとは無限に逃避するだけである。これにたいして、言葉がなおも余命をたもち、有効であるのは、彼らの過去、かつて人間であつた記憶のなかである。それは決して共有されることなく、ひとりひとりにあつて息づいている。囚人にとって過去とその記憶は、すべてよろこばしいものの集積であり、そこでは言葉は無傷のままあたためられ、よろこばしくその機能をたもちつづける。

囚人にとって、およそ不幸な過去というものは、ありえない。すべての囚人にとって、過去は絶対に幸福でなければならぬ。このことは、囚人の見る夢が、例外なく過去の夢であり、例外なく幸福な夢であることからわかる。彼らにとって幸福とはなにか。たとえばそれは、朝起きて、一人で排泄することであり、街路を自分の歩速であるくことであり、あるきながら任意に立ちどまることであり、行きあう一人一人に鷹揚な関心を示すことができるということである。彼は思いついたように立ちどまることができ、そこから引返すことさえもできるのだ。私自身、しばしば<sup>(4)</sup>そのことに思ひおよんだとき、呼吸がとまるような驚きをおぼえた。

囚人が見る夢は、つねににぎやかである。そこでは、彼はつねに<sup>(5)</sup>カンタイされる。言葉はそこでは、善意にあふれている。だれもが、だれをも傷つけない言葉。言葉はそのかたちで、やわらかに彼のなかへ密封される。そのとき鐘が鳴る。吊り下げられたレールの一片、または貨車の車両をさびた鉄の棒が、ごくあたりまえのようにたたく音である。それは三つ鳴り、間をおいてさらに三つ鳴る。起床、その瞬間に、一切のよろこばしい言葉は箱口<sup>(6)</sup>される。言葉は彼の記憶のなかへ拘禁され、果てしなくながい失語状態がふたたびはじまる。箱口された言葉は、おなじ時刻に彼の内部で石化する。それは、ほとんどいつもおなじ時刻である。一定の時刻に眠りに墜ち、

かならず一定の時刻にそこから呼びもどされるとき、夢の長さも一定とならざるをえない。ある時期囚人は、ほとんどおなじ夢を見つづける。それはかならず、ある街の一隅ではじまり、他の街の一隅で終わる。その正確さは、いわば外側から内へ、内側から外へとせめぎあう二つの秩序の拮抗の結果であるかもしれない。卑小をきわめた一人の男の内部と、世界の輪廓がまつとうに拮抗するのは、いわばこのときであるかもしれないのだ。

だが外側から見るかぎり、この拮抗がそのままで持続することは、一人の人格が分裂したままで放置されることである。その分裂をくいとめる力は、彼のなかにはない。このようにして囚人が、ますます深く過去のなかへ自己を閉鎖して行く結果、現実の世界では、言葉の回復がもはや絶望的などころまで彼は追いつめられる。私の友人は、まる三カ月間ほとんど無言ですごしたのち、発言を強要されたが、必要な言葉がほとんど念頭にのぼって来なかったと述懐している。

(石原吉郎『望郷と海』による)

## 問

- (A) 〓 線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書で記すこと)
- (B) 〓 線部(1)について。このような感覚を筆者が別の表現で言い換えている部分を本文中から抜き出し、八字以上十字以内で記せ。
- (C) 〓 線部(2)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
- 1 持続すべきどのような意志も持たず、収容所での日々をただ受け入れること。
  - 2 休憩のあいだ自分がうずくまっている場所を意図的に理解しまいとすること。
  - 3 小さな人間の理解を超える巨大な現実に対する言葉の無力さを自覚すること。
  - 4 個々人の抵抗の意志をくじく戦争という苛酷な現実をひたすら甘受すること。
  - 5 収容所の現実を受け入れ、自分の未来を予想することを決然と拒絶すること。

(D) ——線部(3)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 あたたくやくさしい無関心から生まれる失語状態だけが、収容所のきわめて画一的で冷たくきびしい現実を忘れることを可能にする。

2 収容所では誰もがほぼ同一の生活を強いられ個々人の差異が消失するため、たがいに異なる思考や経験を伝えあう必要性が生じない。

3 収容所の現実のすべてを成り立たせているのは動物的な条件反射であり、そうした行動を人間に固有の言葉で説明しても無駄である。

4 個々人の差異が抹消される収容所生活から得られる実感はあまりに非現実的で、これを日常的な言葉で表象するのは不可能である。

5 誰もが行動の自由を奪われた収容所の現実は、それについて何を語り何を考えようが変化しないのだから、言葉はとことん無力である。

(E) ——線部(4)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 囚人の過去はたとえどんな不幸なものであっても、収容所とは異なり、少なくとも思考と行動の自由だけは奪われていないこと。

2 囚人が過去に享受していた思考と行動の自由は、収容所においては実際以上に稀有なものとして記憶の中で純化されていること。

3 囚人の過去にあつては、収容所とは異なり、どんなささやかな行動であれ自分の意志で決定する自由だけは奪われていないこと。

4 過去の生活で享受していた思考や行動の自由がささやかなものであればあるほど、囚人はこれを幸福なものとして記憶すること。

5 思考と行動の自由が剝奪された収容所においては、人は自分が幸福だった過去の夢を見ることで自由を取

り戻そうとすること。

(F) —— 線部(5)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 夢の中にはやさしくやわらかい言葉が満ちているのに、現実の世界には石のようなかたい言葉しかない。
  - 2 夢の中にはよるこぼしい言葉が満ちているのに、收容所の現実においては絶望的な失語状態に陥っている。
  - 3 夢の中では無制限の幸福を享受できるのに、苛酷な労働を課される日中は束の間の安らぎしか許されない。
  - 4 夢の中では無時間的な自由が確保されているのに、收容所の現実には分刻みで囚人から行動の自由を奪う。
  - 5 夢の中では誰も傷つけない言葉が確保されているのに、收容所の冷徹な支配体制は囚人に沈黙を強制する。
- (G) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 孤独とは言葉によって思想化されることを余儀なくされるものだが、衰弱と荒廢の果てに訪れる寂寥は言葉が必要としない。

ロ 河の岸辺にしゃがみこんで休んでいたときに筆者は、言葉すら必要としない原初的な人間存在のありようを不意に発見した。

ハ 收容所生活において言葉が機能を保ち続けられるのは、人間的な生活を送ることができた過去の記憶の中においてだけである。

ニ 收容所生活においては起床と就寝の時間が厳格に定まっているために、囚人の見る夢の長さは一定にならざるをえない。

ホ 囚人の夢の内容は地理的にもきわめて限定されており、收容所という閉塞的な世界の卑小さを反映している。

二 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答题用紙に書くこと)

人食について、おそらくわれわれはきわめて得体の知れない、まさしく心の奥底の澱（特）のようなキヒ感（イ）をもっている。

われわれは動物であり、一定の間隔をもって食物を摂取しなければならぬ。何も食べ物がないうときには、同種のものであれ何であれ、自らが生きるために食べる。食べなければ自分が死ぬ。

だがそこで、人食をなすかなさないかは、きわめて繊細な問題をひきおこす。

授業などでこの類いのはなしをすると、必ず学生が質問することがある。それはアンパンマンをどう考えるのかということである。（注一）

ただ私自身は、アンパンマンの作者であるやなせたかしという人物についても、この絵本についても、さして深く知っているわけではない。ただアンパンマンが、おなががすいた者に、自分の顔を「食べさせる」ということとは知っている。さらにいえば、それがやなせたかしの戦争従軍経験に依拠するものであるという事実も知識としてはもっている。飢えのなかで何かできること、何かしてあげることとは、飢えている生き物、飢えている同僚に食べ物を与える以外にはない。そしてその極北が、自分を食べてもらうということではないこともよくわかる。

ただし、アンパンマンが「自分を食べてよ」といって、自分の顔をむしりつつ食べさせる姿は、ある意味ではNHK（注二）のサバンナの映像以上に異様な雰囲気をかもしだすものではないだろうか。繰り返すが、アンパンマンが食べさせるものは顔なのである。

この絵本の不思議さは、生命にとつて、そしてとりわけ四肢動物全般にとつて、その人格性（注三）IIパーソナリティを決定する器官である「顔」がそもそも食べ物であり、さらにそれを惜しげもなくちぎって相手に与えることにある。これは自分の肉を食べさせる、他人の肉を食べるというカニバリズム（注四）よりも、さらに業の深さを感じさせ

るシヨサではないだろうか。余談であるが、イギリス人の同僚が、切り身として皿にのった刺身は食べられるが、焼き魚は食べられないと話してくれたことがある。逆に日本人にとっては、豚の丸焼きを連想すればわかりやすいだろう。顔を食べるというのは、たんなるカニバルなものではなく、相当な抵抗感をひきおこすものである。ところがアンパンマンは、顔こそを食べさせるのである。食べてはいけないものの最たる部分が食べ物であるという矛盾が、この絵本のもつとも重要で衝撃的な点ではないのだろうか。

ところがアンパンマンには、もうひとつの奇妙な細工がなされている。<sup>(1)</sup> これもまた衝撃的であるのだが、アンパンマンの顔とは、いささか驚くべきことに、いくらでもとり替え可能なのである。アンパンマンは、おなかをすかせた者に自分の顔を食べさせると、ジャムおじさんというコックの身なりをした登場人物が、ぱつとアンパンマンの顔をいれ替える。アンパンマンの顔そのものは複製可能で、何度もとり替えがきき、かくしてアンパンマンというキャラクターが死んだりすることはない。

これが相当に不思議な事態であることはいうまでもない。顔というのは、人間のみならず四肢動物にとって、唯一性を示す人格を顕示するものなのだから。「誰か」という判断は、普通は「顔」によってなされる。食べられる以上に、唯一的なものがとり替え可能であるということは、その設定をさらに奇妙にさせている。

アンパンマンの顔を食べるときに、実はさしたる罪悪感をもたないのは、それがごく常識的な「アンパン」の形象をなしており、さらに上述のように一回食べても再生産されるものであるからだ。それゆえ、アンパンマンの顔がちぎれても、そしてそれがすばつと飛んでいっても、そのこと自身には安心感すらある。アンパンマンは個別的な存在でありながら、そうであるとはいいい切れない。一人のキャラクターという姿をとりながら、常識的にいえば一人ではないのかもしれない。<sup>(2)</sup> これについて、どう考えるべきなのか。

もちろん、そうである以上、アンパンマンを食べることはカニバリズムではない、という結論をだすことも可能だろう。再生されるということは、ちぎればまた生えてくる家庭菜園の野菜に近いともいえる。だが、それでもこれは人間のかたちをしたキャラクターである。どう考えるべきか。



別の視点でとらえれば、肉を食べること、カニバリズムであることを論じながらも、実際にはわれわれは、われわれ自身の身体をあまりよくみていないのかもしれない。

人間の個別性は、実は顔という器官をのぞけば、さしたる違いはない。自分の内臓のレントゲン写真をみせられても、それが自分のものか他人のものかわかるひとなどはほとんどいない。顔という特殊な器官をのぞけば、実は身体は、人間同士であれ、また四肢動物同士であれ、実際には似たり寄ったりである。

さらに、もつと荒唐無稽なことをのべることもできる。顔とは人格性の中心であるので、さすがにアンパンマンの世界でしか、これを再生産することはできない。しかしながら肉ということであればどうであろうか。現代のさまざまな場面で、身体へのテクノロジーが増していくなか、近い将来人間は人間の肉を不用なものとして切り捨て、あるいは必要であれば再生できるかもしれない。現代におけるアンパンマンの類似物をつくることは、不可能なテクノロジーではないかもしれない<sup>(3)</sup>。アンパンマンの教えは実はこちらにあるとも考えられる。

真面目に言えばこのはなしいくらでも現代テクノロジーのもとで拡張可能なのである。医学においては臓器移植という問題がある。これは a、飢えに起因するカニバリズムとはもちろん次元が違う。 b、自分が生きながらえるために他人を身体にとりこむという意味では c 類似的行為である。臓器移植するというこの技術は、これ自身、別の方向から考えられるべきアンパンマン的なカニバリズムにもおもえる。初期の臓器移植は、ドナーが亡くなったあと、その意思にしたがって、血液型の一致や免疫不全を起こしにくい患者へと臓器をばらして届けていった。ドナーの臓器は亡くなったばかりの「新鮮な」ものであることが不可欠であったので、「脳死」という、死の概念についての定義づけ変更さえおこなわれている。そこでは、これまでは死んだと認識されていないひとを死んだことにしてカニバリズムを可能にしたのである。私の勤めている学部の隣の医学部は、移植についてはきわめて重要な国の機関であるので、ヘリコプターが研究室の上空へ飛んでくるたびに、ああ、新鮮でびちびちとした臓器が届いたのだなという複雑な気持ちに襲われる。

しかしそのうち、ある種の臓器については、生体肝移植に代表される生体移植がなされるようになっていく。

これはますますアンパンマンの状況が広まっていることではないのか。それは誰かの臓器を食している。口から食べるのではない。しかし生きるために身体にとりいれている。

この方向における「アンパンマンの未来」は、すでに、バイオテクノロジーの進展において明示されているだろう。<sup>(注5)</sup> iPS細胞から自己の臓器を形成すること、それが実際に応用され、現実的に臨床の場面でもちいられることはまだまだ先かもしれない。だがもともと受精卵であったES細胞<sup>(注6)</sup>をもちいた臓器のテクノロジーの形成が、「可能的に子供になりうる細胞」という素材であり、やはりカニバリズム的側面があつたことを考えると、iPS細胞が理念的には自己生成する細胞であることには意味がある。これは自食のカニバリズムであるとさえいえる。自己犠牲と自己を救うことの回路が完結したこの場面では、<sup>(4)</sup>カニバリズムは一個体のなかで完結してしまうことになる。

アンパンマンからは遠く離れてしまったかもしれない。だが飢えの問題から出発して、臓器移植に<sup>な</sup>迫りつき、さらにiPS細胞による自己の身体の複製化には、そこで使用される臓器がいくらでも複製可能であることにおいて、アンパンマンのいれ替わる顔という知見は、いつそうひき延ばされているのだろう。それはおそらく、われわれの個別性、私のパーソナリティ、私の個別のいのちという事情を、しだいに消し去りつつあるのかもしれない。無限複製されるアンパンマンの顔の自己犠牲は、おそらくやなせがおもいつきもしなかつた卓見を含んでいるのだろう。

(檜垣立哉『食べることの哲学』による)

(注) 1 アンパンマン——絵本『アンパンマン』における主人公の正義のヒーロー。頭がアンパンになっており、お腹をすかせた人にそれを分け与える。

2 NHKのサバンナの映像——この問題文の部分よりも前の箇所、おなかをすかせたライオンの母子がシマウマを襲い食べる凄惨な映像について語られている。

問

3 四肢動物——脊椎動物のうち、四肢をもつものの総称。魚類を除く両生類・爬虫類・哺乳類・鳥類をいう。

4 カニバリズム——本来の意味は、人肉を食す行為・習慣のこと。人肉食。

5 i PS細胞——受精卵や卵子を用いずに、体細胞を培養して人工的につくられた新型万能細胞。再生医療への応用が期待されている。

6 ES細胞——受精卵が分裂して胎児になるまでの段階である胚を用いてつくられた万能細胞の一種。再生医療への応用が期待されている。

(A) 線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書<sup>かいしよ</sup>で記すこと)

(B) 線部(1)について。「もうひとつの奇妙な細工」とはどのようなものか。最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 食べてはいけないものの内でもその最たるものである顔を、食べさせるようにしたこと。

2 アンパンマンというキャラクターを、死なない存在として設定したこと。

3 アンパンマンの顔をいれ替える登場人物として、コックの身なりをした人物を用意したこと。

4 アンパンマンが人々に自分を食べさせるとい設定によって、異様な雰囲気を生み出したこと。

5 アンパンマンの顔を交換可能なものとするここと、それを人に与えられるようにしたこと。

(C) 線部(2)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 アンパンマンは広く人々に親しまれている作品であり、人々の中のアンパンマンのイメージは作者のおもいつきもしなかった多様なものとなっている。

2 アンパンマンの顔が量産されるのだとしても、こまかな違いが存在し完全に同一ではないのだから、毎回異なったアンパンマンが生み出されていることになる。

3 アンパンマンという存在は、生きながらえるためにその顔を食した者の中で生き残り続けるので、そこで別の新たな生を経験することになる。

4 顔という器官をのぞけば生き物のあいだにはさしたる違いがないので、それぞれの個体は大まかには交換可能な存在として考えることができる。

5 人格の個性性を示す顔がいくらでも生産できる通常のアンパンと重なるように描かれているので、アンパンマンという存在の唯一性は確定できない。

(D) 線部(3)について。「こちら」が意味する内容はどのようなものか。最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 身体を再生産するなどという荒唐無稽なことは、さすがに作り話の中でしかできないであろうこと。

2 身体に関するテクノロジーの発達によって、人の肉が不用品なものとして切り捨てられる危険性があること。

3 人格性の中心にあるものでなければ、人体の再生や代替は次第に可能になっていくであろうこと。

4 われわれ人間もまた、アンパンマンのように自らを他者に差し出す存在でありえるということ。

5 われわれが自分自身の身体をあまりよくみていないということに改めて気づく必要があるということ。

(E) 空欄 a ) c ) にはそれぞれのどのような言葉を補ったらよいか。その組み合わせとして最も適当なもの、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 a そもそも b だから c 本来

2 a 元来 b よつて c 意外にも

3 a 結局 b つまり c いわゆる

4 a 実際には b しかし c いまだに

5 a もとより b だが c まさしく

(F) 線部(4)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 自分の身体を材料として外部にさし出し、それを自分が生きるためにとり入れることをしているので、そこに他者の身体は関与していない。

2 何者かを犠牲とすることの罪悪感を免れるために、外部にあるものを自分の中にとり込むことをあらかじめ断念している。

3 他者などいくらでも利用可能な道具のようなものだと思ひ込むことによって、自分だけの世界に埋没してしまっている。

4 修復を要する部分がないくらいまで完璧な状態が生み出されることによって、再生や代替が不要なものとなっている。

5 個別性やパーソナリティという概念が消え去ることによって、差異の消え去った一つの閉鎖的なものとして世界がとらえられてしまっている。

(G) 次の各項のうち、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 「誰か」という判断はその人の外見によつてではなく、内面を基準として行われるものである。

ロ テクノロジーの発達は死の定義すら変えてしまうものである。

ハ 顔を食べることへの抵抗感については、文化圏によつて違いがある。

ニ われわれもまた動物であり食べるものがなければ死んでしまうのだから、罪悪感を越えてカニバリズムを肯定すべきである。

ホ アンパンマンについて考察することから得られる知見はすべて、顔の唯一性という問題を中心としている。

三 左の文章は『落窪物語』の一節で、年老いた中納言（忠頼）を、娘である女君とその夫の道頼が見舞う場面から始まっている。これを読んで後の設問に答えよ。（解答はすべて解答用紙に書くこと）

弱るやうになり給へば、<sup>(1)</sup>「なほ死ぬべきなめり。今しばし生きてあらばやと思ふは、我、<sup>(2)</sup>年ごろ沈みて、昨日今日の若人どもに多く越えられて、なりおとりつるになむ、恥に思ひける。我が君のかばかりかへりみ給ふ御世に、命だにあらば、なりぬと思ひぬるに、またかく死ぬれば、我が身の大納言になるまじき報にてこそありけれど、<sup>(3)</sup>これのみぞあかずおぼゆること。さても、老いはて、死にのはての面立たしきは、おのれにまさる人よにあらじ」とのたまふを、<sup>(注1)</sup>大将聞き給ひて、あはれにおぼゆること限りなし。女君、「いかで大納言をがな。一人なし奉りて、あかぬことなしと思はせ奉らむ」とのたまふを聞き給ひて、<sup>(5)</sup>げにさせばやとおぼせど、<sup>(注2)</sup>数より外の大納言なさむことは難し。人のはた取るべきにあらず。我がを譲らむの御心つきて、父大臣の御許にまうで給ひて、<sup>(4)</sup>「かくなむ思ひ給ふるを。幼き子ども多く侍れど、それが徳を見すべく、行く末あるべきことにもあらぬ代りには、<sup>(6)</sup>このことなむし侍らむと思ひ侍る。御けしきよろしう定めさせ給へ」と申させ給ふ。<sup>(7)</sup>「何かはさ思はむを。はやうさるべきやうに奏を奉らせよ。大納言はなくてもあしくもあらじ。我が心なる世なれば」とおぼしてのたまへば、限りなく喜び給ひて、申して、奏奉らせ給ひて、中納言、大納言になり給ふ宣旨くだし給ひつ。これを聞きて、大納言わづらふ心地に泣く泣く喜び給ふさま、親にかく喜ばれ給ふに、<sup>(注3)</sup>功德ならむと見ゆ。

喜びに、起き立ちて願立てさす。<sup>(注4)</sup>「定業の命にても、給へ」と、心にも願立てさするけにや、<sup>(8)</sup>少しおこたりて、思ひ強りて起きゐて、うちへ参るべき日見せ、<sup>(注5)</sup>とかくせさすべきことあておこなふとても、「我が子ども七人あれど、かく現世、後生うれしき目見せつるやありつる。かかりける<sup>(注7)</sup>仏を、<sup>(注8)</sup>少しにてもおろかなりけむは、我が身の不幸なる目を見むとてこそありけれ。子二、三人婿とりたれど、<sup>(注9)</sup>今に我にかかりてこそはありつめれ。この殿は<sup>(注10)</sup>塵ばかり仕うまつることもなけれど、御かへりみを、かくこよなく見る、かへりては恥づかしき心地して。我死なば、代りには、男子にもまれ、女子にもまれ、<sup>(注11)</sup>君に仕うまつれ」といとさかしう言ひいます。かかれば、<sup>(注12)</sup>北の

方、<sup>(9)</sup>「憎し、とく死ねかし」と思ふ。

(注)

- 1 大将——道頼。若くして出世し大納言を兼ねる。「父大臣」が時の権力者であり、前途洋々の血筋。
- 2 数より外の大納言——定員外の大納言。
- 3 奏——朝廷への上奏文。
- 4 定業の命にても、給へ——前世から決まっている寿命であつても、延ばしてください。
- 5 見せ——吉凶を占わせ。
- 6 我が子ども七人——北の方との間の子供のこと。
- 7 仏——ここでは女君のこと。
- 8 少しにてもおろかなりけむ——道頼が女君を粗略に扱つてきたことを指す。
- 9 今に我にかかりてこそはありつめれ——今も私を頼りにばかりしているようだ。
- 10 塵ばかり仕うまつることもなければ——少しもご奉仕申し上げることはなかつたのに。
- 11 君——道頼。
- 12 北の方——道頼の妻。かつて継子である女君をいじめ、今は道頼によつて復讐を受けている。

問

(A) ——線部(1)の現代語訳として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 やはり私は死ぬべきであると言うのか
- 2 やはり私は死んでしまひそうであるようだ
- 3 このままだと私は死ぬことになりそうだ
- 4 このまま私は死ぬわけにはいかないようだ
- 5 ついに人間は死ぬ定めであるようだ





- 3 何がお前をそう思わせるのか  
4 お前の思いは全く理解できない  
5 お前の思う通りに進めればよい

(I) ——— 線部(8)の現代語訳を七字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(J) ——— 線部(9)について。北の方はなぜこのように思うのか。その理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 忠頼が、延命の願立てのために北の方の子供たちを出家させようとしているから
- 2 忠頼が昇進して財を得たことで、莫大な遺産の相続が期待できるから
- 3 忠頼が亡くなれば、北の方の子供たちが早く道頼に仕えることができるから
- 4 忠頼が、仏の教えをないがしろにしてまで昇進にこだわっているから
- 5 忠頼が女君と道頼を褒める一方で、北の方の子供たちをけなしたから

【以下余白】



